

申請者名 外科学講座 助教 野呂拓史

課題名 大腸癌肝転移に対する術前化学療法後の肝切除例における
新たな予後予測因子の検討

研究対象

2008年4月から2013年12月までの間に防衛医科大学校病院で術前化学療法後に治癒的肝切除を施行された大腸癌肝転移患者さん54名の臨床情報(放射線画像検査所見、病理結果等)を使用致します。

連絡先:

外科学 野呂拓史

TEL 04-2995-1511 内線 2356

お知らせ文

大腸がん肝転移に対する治療は、新しい抗癌剤の開発により、当初切除不能と思われた例も、化学療法後に切除可能となることも珍しいことではなくなってきました。

また、切除可能例や、切除可能かどうかのボーダーラインの症例に対しても術期化学療法が肝転移切除後の予後を改善するとの報告もあり、世界的に受け入れられつつあります。しかし、このような集学的治療を受けた方にとって、これまでの予後を予測する指標は、あてにならなくなってきました。

例えば、腫瘍の最大径は、これまで大腸癌肝転移の予後予測因子の一つであり、大きさの変化は化学療法の効果判定の基準として受け入れられてきました。しかし、様々な新規抗癌剤が使用されている最近の報告では、予後予測因子としては正確ではなく、また化学療法の効果を正しくは反映していないとの報告もあります。

新たな抗がん剤と手術の組み合わせ治療における、治療成績、予後を予測する新たな因子を化学療法前後の様々な検査データをもとに検討することがこの臨床研究の目的です。これにより、術前化学療法後の大腸癌肝転移切除例において、術前での予後予測因子を検討することで、不要な手術による侵襲を避け、適切な治療方針を決定することができる可能性があります。これは、今後の大腸癌肝転移の成績向上に重要な資料となります。

対象は2008年4月から2013年12月までの間に防衛医科大学校病院で術前化学療法後に治癒的肝切除を施行された大腸癌肝転移患者さん 54名の臨床情報（検査データ、病理結果等）を使用致します。

本研究は、今後、研究のために患者さんから検体を採取したり投薬をしたりすることはなく、これまでの外来及び入院治療での既存資料等のみを用いる後方視的研究です。

患者さんの臨床データはID等の個人情報とは無関係な番号付与による匿名化によって管理され、その他通常の診療と同様にプライバシーが保護されます。また、現在及びこれまでに、防衛医科大学校病院外科で大腸癌肝転移に対する外科的治療を経験された方で、ご自分の治療経過等の臨床データを研究に使わないで欲しい、というご希望が有れば、研究リストの連絡先までご連絡をいただきますようお願いいたします。

なお、研究への使用の拒否の意思を表明されても、防衛医科大学校病院外科における診療には全く何の影響もなく、いかなる意味においても不利益をこうむることはありません。

研究代表者・照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

〒359-8513 埼玉県所沢市並木3-2

防衛医科大学校病院 外科 野呂 拓史

TEL:04-2995-1511 (内線 2356)